

61 富士の嶺にゆふ居る雲のながき雲ふじ ね うい くも「ころのさやぎ静しずもりにけり

なかむらけんきち

中村憲吉

【歌意】 富士山の峰に結ばれているような長い雲。それを見ているとなぜなか

かざわついた心が静まってくる。

〈鑑賞〉 富士山にかかつている長い雲。まるでつながっているように結ばれた

この雲を見ていると、ざわついた心が落ち着きを取り戻してゆく、と詠む一首です。作者は東京大学卒業後、新聞社勤務を経て、広島の家業を継ぎました。伊藤左千夫に師事し、大正から昭和初期にかけて、「アララギ」で活躍した歌人です。

62 崩れ平らぐ富士山ならばそれも見よ十万年も生きながらへよくず たい ふじさん み じゅうまんねん い え

つちやぶんめい

土屋文明

【歌意】 崩れて平らになっていく富士山ならばそれも見てみよ。十万年でも生きな

がらえよ。

〈鑑賞〉

もしも崩れて平らになってしまふ富士山ならば、眼をそらさずにそれも見よ。たとえ十万年でも、生きながらえよ、と詠む百歳を超えて生きた作者の一首です。

63 富士の雪の水と言ひつぐ水すくひ苔むす水草ゆるくめぐれりふじ ゆき みず いい みず いこけ みずくさ

いまいくにこ

今井邦子

【歌意】 富士山の雪解け水だと言い伝える水をすくい、苔が生えた泉には水草

がゆつたりと円を描くように揺れている。

〈鑑賞〉

千八百九十年に生まれた作者は二歳の時に両親と離れ、祖父母に育てられました。やがて、祖母の看病もしつつ、高等女学院で学び、二十代から歌文集を刊行しています。「伊豆の山冬木林の下草にすみれはいくつ花咲きにけり」等の歌も静岡県で詠んでいる作者です。

64

富士を見てよろいじ父のうしろでの今日は「いそよび」くつてならず

いしいなおさむらう

石井直三郎

【歌意】

富士山を見て喜ぶ父親の後ろに立って、今日は特にさびしくてならない。

〈鑑賞〉

富士山を見て喜ぶ父親の後ろに立って、今日はことさらに淋しくてならないのはどうしてなのでしょう。作者自身も、自分がここまでの淋しさを覚えていることに戸惑っているのかもしれませんが。「たはむれに母を背負ひてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」という石川啄木の母を背負う歌も思い起こさせる一首です。

65

海越えて富士の山嶺に雪白し木々の葉散らす雨晴れゆけば

つちだこうへい

土田耕平

【歌意】

海を越えて見える富士山の山頂の雪が白い。木々の葉を散らすように降っていた雨が晴れわたっていくと。

〈鑑賞〉

大正から昭和時代に活動した歌人であり、童話作家でもあった作者は昭和十五年に四十六歳で亡くなるまでに歌集や童話集を何冊か刊行しました。他に「杉の穂の高きを見れば月澄める空をわたりてゆく風があり」などの歌を遺しています。

66

まためがね
股眼鏡まためがねしてつれづれに天てんを見たりけり富士玲瓏ふじれいろうと逆さかさに澄すめる

いかだいかいち
筏井嘉一

【歌意】

上体を屈かがめて股の間からなんとなく空を見上げた。富士山が美しく透すき通るように逆さまに見えたよ。

〈鑑賞〉

上体を屈めて、股の間から、なんとはなしに天を仰いでみたら、逆さまに見える富士山もとても美しく澄んでいた、というユーモラスな短歌です。「股眼鏡」というとぼけた味わいのある語と、「玲瓏」という硬質の言葉との対比が生きています。

67

いてぞら ふじうぬき く お しづ
凍空は富士内抜に暮れてをり邃しづけきものはつひに厳いかしき

ほづみきよし
穂積忠

【歌意】

凍りつくような空は富士山をそのまま抜き取るように暮れている。奥深く静かなものは最後まで厳せいそかなものだなあ。

〈鑑賞〉

冬の日没。富士山はその闇の中に姿を消していきます。「邃」は、奥深いことを意味します。富士山の持つ奥深さ、それが静かに厳かに暮れていくさまを表現した短歌です。十六歳で北原白秋に師事し、旧制葦山中学から国学院大学に進んで、釈しやんちやうくわう迢空にも学んだ作者は、のちに三島南高等学校の校長も務めた歌人でした。

68

富士が根の萱生高原うちわたす空の涯より風つぎわたる

あかしかいじん
明石海人

【歌意】

富士山の一面に萱が生えた高原を、見渡す限り広がる空のはてから風が絶えず吹き抜けていく。

〈鑑賞〉

富士山の裾野には一面に薄すすきが生えている場所があります。そこを風が次々と吹き抜けて草を揺らし続けています。ハンセン病に苦しみつつ、失明もしながら、作者は歌を詠み続けていきました。

69

さわやかに八月富士の朝焼けを観まく来しかばまなこはなたず

よしのひでお
吉野秀雄

【歌意】

さわやかに八月の富士山の朝焼けを見たくて来たのだから、私は目をそらすことなく見つめている。

〈鑑賞〉

八月はまだ暑さの盛りですが、暦の上では秋も間近です。その時期の朝日に染まる富士山。その美しさをみるために来たという作者。大学在学中に結核を患い、中退せざるをえなかったものの正岡子規・伊藤左千夫らの短歌と出会い、歌を詠み続けました。「富士の裾愛鷹あしたか寄りの草山に日の当る見よ春は立ちにけり」等、何首も富士山を詠んでいます。掲出歌は長尾峠からの一首です。

い
ず
こ
じ
ま
な
が
い
せ
ん
よ
よ
く
も
の
ふ
じ
さ
ん
あ
そ
伊豆の小島に流されゐても仙なれば夜夜雲に乗り富士山に遊べりき

まえかわさ みお

前川佐美雄

【歌意】

伊豆の小島に流されていても仙人なので、夜な夜な雲に乗って富士山を
飛び回った。

〈鑑賞〉

この「仙人」は役小角。えんのおづぬ奈良時代の伝説の修験者しゅげんじやです。その不思議
な力を恐れられて伊豆の島に流されたという言い伝えがあります。